Q 言い伝えの中に災害の話が残されていると聞きますが、何か具体的なことはありますか。

A 短い時間軸だと災害記録や防災訓練、防災マップなどが思いつきますが、長い時間軸だと「石碑」「ものがたり」に言い伝えが残っていたりします。

（１）はじめに

災害対策基本法の第七条（住民等の責務）には、以下のような記述があります。

３　前二項に規定するもののほか、地方公共団体の住民は、基本理念にのっとり、食品、飲料水その他の生活必需物資の備蓄その他の自ら災害に備えるための手段を講ずるとともに、防災訓練その他の自発的な防災活動への参加、過去の災害から得られた教訓の伝承その他の取組により防災に寄与するように努めなければならない。

このように、過去から得られた教訓を伝承することは「住民等の責務」とされています。近年の災害多発を受け、その災害の伝承＝「責務」がいよいよ重要になってきているのでしょう。

国土地理院では、「災害教訓の伝承に関する地図・測量分野からの貢献として、これら自然災害伝承碑の情報を地形図等に掲載することにより、過去の自然災害の教訓を地域の方々に適切にお伝えするとともに、教訓を踏まえた的確な防災行動による被害の軽減を目指します。」として、国土地理院が公開している HP「地理院地図」において、自然災害伝承碑の位置が表示されるようになっています。

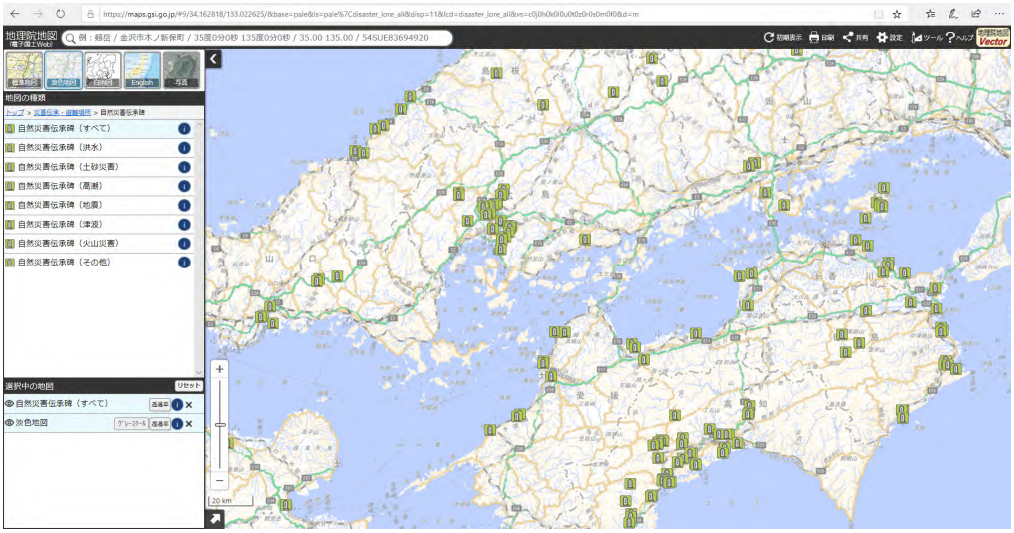

図-1　自然災害伝承碑の位置（国土地理院ウェブサイトより）

（２）土砂災害の言い伝え

平成 26 年 8 月豪雨の災害調査に従事する中、筆者は、被災地に「蛇王池伝説」なるものが残っていることを知りました。この言い伝えには土石流災害を伺わせる記述があり、そのような災害伝承の形があるものかと興味を持ちました。そこで、広島県下の昔話を調べてみたところ「蛇」にまつわる昔話が残されていました。

現在、国土地理院地図では「災害伝承碑」の位置を残し、災害発生の痕跡を可視化していますが、ものがたりとして人から人へ言い伝え残す災害伝承も、一つの形として有効ではないでしょうか。ここでは、三つの例をご紹介します。

（３）緑井の蛇王池伝説

平成26年8月の土砂災害が発生した広島市安佐南区八木地区に「蛇王池（じゃおういけ）伝説」なる大蛇退治の言い伝えと石碑が残っています。これは、阿武山に住み往来の人々を困らせていた大蛇を八木城主香川家の家来、香川勝雄（かがわかちお）が退治した武勇伝です。

民話で蛇は水にまつわる生き物として取り上げられることが多く、長野県木曽郡南木曽町では、かつて土石流のことを「蛇抜け」と呼んでいました[2)]。ここ八木地区においても、地形、史跡の立地、地名などが土砂災害を示しています。

図-1 は蛇王池伝説の碑と“蛇王池の名残”として伝わる小池の位置です。石碑は JR 梅林駅から北東 130m 程度の位置にあり、さらに 40m ほど山側に小池があります。蛇退治に使われた太刀がかつて奉納されていた光廣神社もあります。

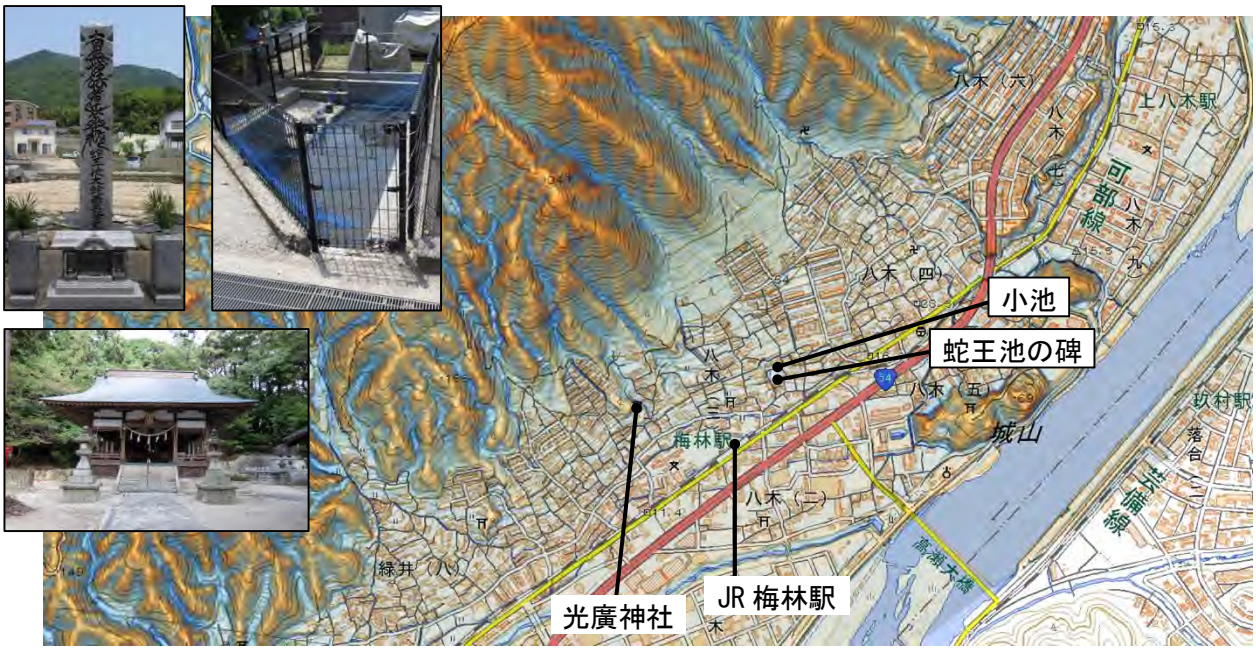

図-1　蛇王池の碑と小池の位置[1)]

（国土地理院発行 25,000 分の 1 地形図と朝日航洋（株）計測･作図による陰陽図を重ね合わせた）

石碑には「1532 年（室町時代）の 4 月 2 日、阿武山の中腹にて香川勝雄が大蛇を退治し、その首が富池に落ちた。それを蛇王池と呼ぶ」との内容が記述されています。この伝説は、

香川景継が記した「陰徳太平記」の八巻「香川勝雄大蛇を斬る事」にさかのぼります。要約すると「天文元年（1532 年）の春、阿武山中腹に大蛇があらわれ、往来の人を悩ませた。八木城主、香川光景（みつかげ）は若侍香川勝雄（かちお）に退治を託す。勝雄が退治に向かうと風が強く吹いて村雨となり、岩は崩れ、岸は裂け、山が鳴り、あたりが真っ暗となった。勝雄は格闘の末、大刀で大蛇を斬り落とした。首は大暴れして七八丁（約 7-800m）飛び、また一丁飛んだ。首は地を穿ち岩をくつがえし、血は川のごとく流れて淵となった。首は池に埋まったが、うめく声は人々の肝を冷やした。勝雄は退治後、池で刀を洗った。そこを“太刀のぶ川”と呼んだ」。

「岸が裂け」、「岩が崩れ」、「蛇の頭が淵に埋まる」などの記述は、土石流の諸現象を的確に記述していると言えます。

これらの言い伝えについては、佐古 [2)]による詳細な検討があります。興味がある方はご参照ください。

（４）仏通寺のたきの大じゃ[3)]

広島県三原市にある仏通寺（ぶっつうじ：公式 HP では佛通寺となっている、写真-1）には、開祖前の出来事として土砂災害を感じさせる昔話が残っています。要約すると、以下のような感じでした。

写真-1　仏通寺
（2023 年 6 月撮影）

・山にこもる大蛇に村人が畏れていた。
・そこで旅の僧が「ここにお寺を建てたい。里の大津の湖に戻れ」と大蛇を説得。
・大蛇が旅立つと、ものすごい大夕立に。ごうっという山鳴りの音、はげしい風、かみなり。
・その後、森だった山の入り口の一部があらい流され、平らな大地ができ、この広場に仏通寺が建てられました。

仏通寺の脇を流れる仏通寺川は、標高 350～400m の小起伏面を浸食し、深い渓谷を形成しています。河川沿いの急斜面が崩壊し、もたらされた土砂（＝大じゃ）の堆積で平坦地を形成した可能性は十分考えられます（図-2）。寺の開祖が 1397 年とあるので、このものがたりは 600 年以上前の出来事が言い伝えとして残されているようです。

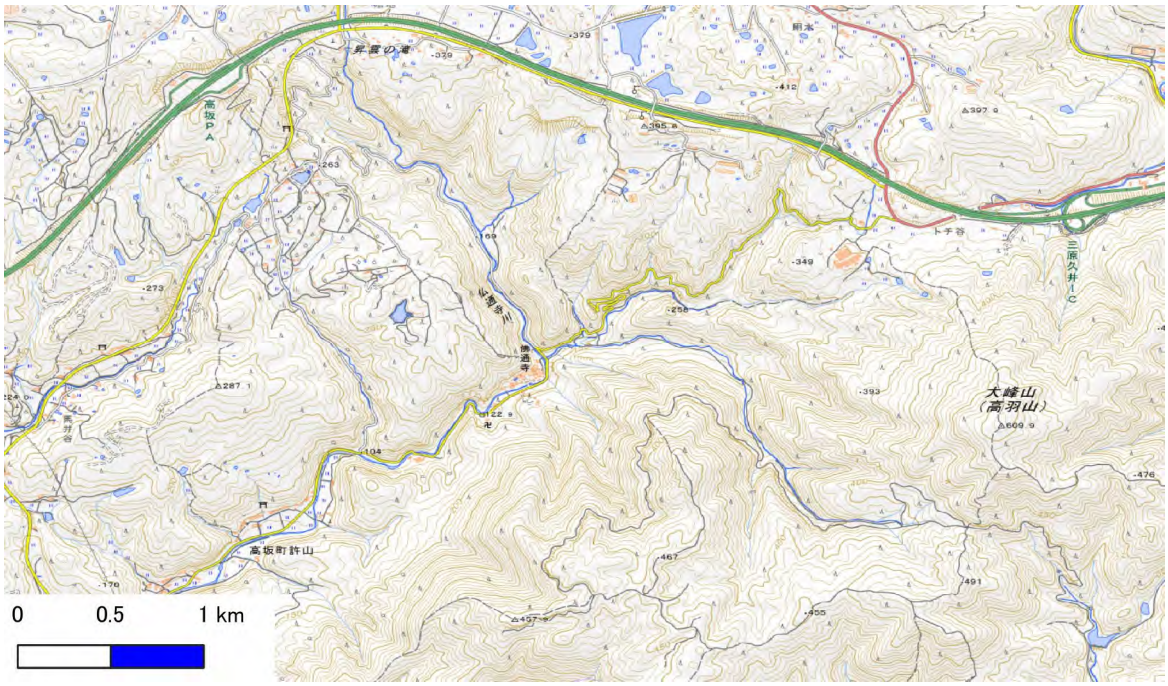

図-2　仏通寺とその上流の地形（電子地形図 25,000（国土地理院）を加工して作成）

（５）八頭（はっとう）さんの大蛇[4)]

広島県三次市君田町櫃田地区に「八頭さんの大蛇」という言い伝えがあります。豪雨で蛇が山を下り、山が静まる話です。

・広島県と島根県の境近くに、櫃田という山里があった。
・そのうしろに「八頭さん」という大きな山があり、八ぴきの大蛇が住んでいた
・ある夏の昼さがり、急に空が暗くなり、かみなりが鳴り、風が山を鳴らし、雨が大地をたたきました。
・真っ赤な火をふき、きりもみしている大蛇がはっきりと見え、ゴーッという地鳴りとなまぐさい風とともに地面がゆれ、大蛇があれくるう。
・そのうち、八ぴきの大蛇が一ぴきずつ八頭さんの山を下り、ふもとにある川のふちに入り、八頭さんはぴったりと静まった。

図-3　櫃田地区周辺の地形（電子地形図 25,000（国土地理院）を加工して作成）

図-3 は櫃田地区周辺の地形ですが、標高 813m の「八頭が丸」が“八頭さん”と思われます。「君田町櫃田誌[5)]」によると、須佐之男命（スサノオノミコト）が出雲の国で退治した大蛇の亡霊に追われ、“八頭丸山”にて休息したとの言い伝えも残っています。

この八頭が丸から東に下った神野瀬川沿いには、「沖積錐」と呼ばれる緩傾斜地があります。これは八頭が丸からの土砂堆積繰り返しで形成されたものと考えられ、何か関連がありそうです。また、この一帯はかつて砂鉄産業が盛んであったことから、鉄穴流し（かんながし）との関連性があるかもしれません。

【引用文献】

1)日本応用地質学会編（2016）：平成 26 年広島大規模土砂災害調査団報告書，p. 13-16.
2)佐古憲作（2020）：広島民俗，No. 94，p. 1-24.
3)広島県小学校図書館協議会編（1978）：八頭さんの大蛇，広島の伝説，p. 51-56.
4)広島県小学校図書館協議会編（2005）：仏通寺のたきの大じゃ，読みがたり広島のむかし話，p. 217-222.
5)君田村文化財保護委員会編（2002）：君田村櫃田誌，p. 336.

（回答者　小笠原 洋）